

〈書評〉

水谷驍著『ジプシー』平凡社新書、2006年

舟木 讓

人権を巡る議論の中で必ずといって出てくる二つの考え方がある。一つは差別問題等の存在を「知らせない」ことで「寝た子を起こす」危険を避けるべきであるとの考えである。ここには、部落差別を初めとして、差別される側の存在を知らさなければ、やがて時間の経緯と共にそうした差別は自然に解消されるという考えがある。しかしながら、この考え方が差別の歴史を隠蔽し、また不正確な情報が人口に膾炙し新たな偏見や差別を再生産し、同じ過ちを繰り返す可能性をはらんでいることは言うまでもない。それともう一つの考えは、差別糾弾に対してその問題の本質を明らかにすることなく、一つの対策として、すなわち糾弾回避の方便として、主に表現に関わる分野において自主規制するというやり方であろう。いわゆる、差別語、不快語と呼ばれる言葉に対するマスコミや出版界の自主規制である。日本においては、1970年代のはじめに大きな社会問題となって糾弾闘争の一つとして社会の人権意識の向上ひいては、隠れた差別や無意識の差別感情を明らかにすると

いう点でも大きな成果をもたらした¹。こうした動きはもちろん日本だけでなく世界的にも広がっており、現在ではPC (Political Correctness) 表現という形で自主規制された言語表現が行き渡りつつある。

ただし、これは、一見すると差別に対する一定の理解あるいは配慮というように見えるが、時には差別の本質を明らかにすることなく、臭いものには蓋式で変革する、という誠実な努力を放棄してしまう危険性をはらんでいると言えよう。その典型とも言える一つの言葉に「ジプシー」という呼称が存在する。ヨーロッパにおいて広く存在している「放浪の民」というイメージが定着している「ジプシー」は、ヨーロッパ社会において長く差別の対象であった。そして、第2次世界大戦中にはナチス・ドイツにおけるホロ・コーストで殲滅の対象にもなった。そうした歴史的な差別の存在に対する反省から、戦後は、その差別解消に向けて、特にヨーロッパ在住の「ジプシー」出身の知識階級を中心に差別と偏見の歴史を検証し、差

1 本稿でその歴史的意義をたどる事はしないが、当時の運動の様子、またマスコミ各社の対応等に関しては次の資料等に記録として残されている。

部落解放研究所編『表現と人権』解放出版社、1994年
放送批評懇談会編『使えない日本語 放送タブーの実態』いれぶん出版、1975年
用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会編
『ゆたかな日本語をめざして…「差別用語」』汐文社、1975年

別と偏見解消に向けての取り組みがなされることとなった。そうした取り組みから出てきた一つの果実が呼称の見直しであった。「ジプシー」という呼称が歴史的にばらまいてきた一種ステレオ・タイプの印象（例えば、「放浪の民」「無知蒙昧の民」「定職をもたず、盗みやかっぱらいで生計をたてる」等々）の払拭には、「ジプシー」という表現そのものが「差別語」「蔑称」の言語であるというレッテルを貼って、公には使用しないという方向性が確認されたようであった。その結果として、あまり事情の通じていない、ましてや日常で「ジプシー」の人々に接する機会はまれな日本においてさえ「ジプシー」は差別語であるとの認識が広く行き渡ったと言われる。しかし、その言い換えが如何に乱暴な「ジプシー」認識につながり、自らの主体的な判断を放棄して、問題の本質を正確に理解することに怠惰となり、さらなる問題を生み出してきたかを説得力をもった資料によって明らかにしてくれるのが標記の新書である。

評者自身もフラメンコを生業としている多くのスペイン人が自らのことを「ヒターノ（スペインのジプシー出身者の呼称）」と誇りを持って名乗っているのを幾度となく目にしており、「ジプシー」が差別語であり使用してはならないという言説にじっくりこないものを感じていただけに得心のいく内容であった。新書という性格上、専門書としての体裁を取っておらず、また著者自身も参考文献が英語圏にとどまっているという限界を自覚しているため、世界全体における「ジプシー」研究とうたうには難しいところもあるが、この問題を通して改めて、無自覚で機械的に差別語、不快語を読み替えることの問題性は、少なくとも明らかになっており、人権問題が多様化し、また、人権意識も多様化している今日に一石を投じる良書であると言える。そして、筆者は表題として、挑戦的にあえて「ジプシー」という「差別」語を用

いることで、問題の本質を明らかにしようとしても考えられる。筆者は「おわりに」の中で、「ヨーロッパにおけるジプシー像の変遷の検討は、彼らのイメージが15世紀にはじめて姿を現したときから今日にいたるまでほとんど変化していないことを明らかにした。18世紀末以降の『科学的』ジプシー像もかえってそうしたイメージの固定化につながった。語るに足る科学的な探求が始まったのはようやく1970年代以降のことにすぎない。」（本書237頁）と述べるが、この言葉こそがこの問題が古くて新しい問題であるとの本質を象徴的に表していると言えよう。本書の構成は、以下の通りである。

- 第1章 ジプシーと呼ばれる人びと
- 第2章 ジプシー像の変遷
- 第3章 歴史
- 第4章 ジプシーの現在
- 第5章 日本人とジプシー

誌面の制約上全体を紹介することは出来ないが、特に前半に「ジプシー」という存在に象徴的に現れた権力と人権侵害の問題が良く示されていると思われるのでそこを中心に以下で論評していくものとする。

まず、第1章において筆者は、「ジプシー」と呼ばれる（呼ばれた）人々の現状を、「人口と分布」「ジプシーとは誰か」「ジプシーという呼称」の三つの項目によって明らかにする。そこでは、全世界における「ジプシー」人口への言及からはじまるが、その統計の不正確さと正確な調査の困難さが、差別の歴史と人々の認識のなさから語られる。少しでも想像力を働かせれば分かることであるが、差別されている階層に属しているものが、自らそうだというように名乗るには相当な覚悟がいるし、実際、長い歴史、広範囲にわたって生活しておれ

ば、他の人々との交わりもあり、そのうち自らも認識しなくなった「ジプシー」も現れて不思議ではない。「当然のことながら、特別な理由がないかぎりジプシーと自己申告したがるに違いないだろう。多くは主流民族として申告し、そうでなければ相対的に無難なほかの民族名を名乗ることになる。」(本書21頁)のは当然である。また、政治的な思惑から過大な申告が行われ事もあるようだが、そうした事情を勘案した上で、約1000万人がヨーロッパに存在していると示され、一部の例外を除いては数十人から多くて数千人単位で居住しているため、「主流民族」に対する力は極めて微弱であったことが明らかにされる。ここから考えてもジプシーに対する広範囲かつ長期間にわたる差別がいかに大きな傷を残して来たかがうかがえる。また、外見、言語、宗教、職業、定住生活か「放浪」生活かといったこれまで無批判に形成されてきた「ジプシー」に対する固定観念がいかに「科学的」根拠に乏しいものであるかが検証される。さらにまた、本書の核心ともいえる呼称の問題が取り上げられるが、ここで最近増えている「ロマ」というPC表現についても言及がなされる。そして、「ロマ」という表現が提唱されたのが1971年の第1回世界ロマ会議においてであり、必ずしも「ジプシー」に属する人々の総意で決定された呼称ではないことも示唆される。

続く第2章、第3章において15世紀初頭にヨーロッパ各地にはじめて現れたとされる「ジプシー」の歴史が検証される。ここでは、ライプツィヒのドミニコ会修道士コルネリウスによる記録等、15世紀の「ジプシー」像が紹介され、当時の評価が、「異質な集団」に対する好奇と不安から発していったことが明らかになる。そして、現在のヨーロッパにおける「ジプシー」理解に決定的な影響を及ぼすこととなった歴史学者ハインリッヒ・ゲレルマン(1753-1804年)の「科学的」ジプシー像に言

及がなされる。彼は、1783年に『ジプシー—ヨーロッパにおけるこの民族の生活と経済、習慣と運命、ならびにその起源に関する一試論』を上梓するがそこで「歴史上はじめて科学的なジプシー像を確立したと主張した」とされる。その著書で、「ジプシー」が「インドの不可触賤民出身のひとつの民族で、どこにあっても基本的に同じ外見的特徴、同じ生活様式と習慣、同じ言語をもつ」(本書60-61頁)という「ジプシー」像が提唱されることとなり、後のステレオタイプな「ジプシー」理解に決定的な影響を有することとなる。その影響力はアカデミズム世界や、警察をはじめとする政府機関にまで及んだと言われるが、筆者によるとその理解は極めて悪意と偏見に満ちた主観的で恣意的なものであるとされる。すなわち、ゲレルマン自身の差別的な視点から都合の良い資料を2年間という短期間に寄せ集め、あたかも「科学的」根拠があるかのように装い、「ジプシー」が差別される理由のある集団という位置づけを行ったのであった。さらに著者はそうした乱暴な「学説」が今日まで流布してきた理由としてジプシー研究がアマチュアの手ゆだねられてきた長い歴史があり、いったん認められた「学説」に対して研究を避けてきた歴史を指摘する。ここには、アカデミズムの閉鎖性によって「科学的」でない偏見と差別が今日においても数多く存在する可能性が散見されると言えよう。

さらに筆者は、ゲレルマンの理解の延長線上で「ジプシー」をロマン主義的に脚色したイギリスの作家ジョージ・ベロー(1803-81年)を紹介し、今日の偏見に満ちた「ジプシー」理解がいかに形成されていったかを明らかにした後、1970年代以降に始まる「参与観察」と呼ばれる手法を用いた実証的研究による「ジプシー」理解の本格的な研究の流れを解説していく。そこでは、フランスのジャン・ピエール・リエジョワによる『ジプシー—

図解の歴史』(1986年)やイギリスのアンガス・フレザーの『ジプシー』(1992年)といった最近の研究から、次第にこれまでの呪縛から解放されつつある過程が紹介される。中でも、ここまで偏狭な「ジプシー」理解が形成されて来た原因の一つを「烙印押捺」(本書82頁)と呼ばれるプロセスで説明しようとしたオランダの社会人類学者ウィム・ヴィレムスの仮説は興味深い。彼は、ジプシーに対して時の政治権力や教会が自分たちにとって都合の悪い集団の排斥のために一定の「烙印」を押すことで保身を図ってきたというものである。ここには、「ジプシー」に限らず、時代時代の権力というものがその保持のために行う典型的な情報操作と社会の分断の構図が象徴的に示されていると言えよう。

この後の章において、本書は、具体的な「ジプシー」のヨーロッパあるいはそれ以外の地域への広がり、ならびにその現状について紹介した後、日本での「ジプシー」理解さらには最近注目されている「サンカ」との類似性に言及している。

本書では、一つの集団に対する人権侵害の実際を丁寧に考察することは容易なことではないことが示される一方で、その解明への努力を怠り、大きな摩擦を避け、糾弾を回避するためだけに表面的なPC表現や、ステレオタイプ的な「知ったような」解説をもって良しとする風潮は、それぞれの歴史と広がりをもっているはずの人権侵害の実態を、隠蔽するというところに安易に繋がっていくであることも同時に示唆されているといえよう。筆者はたびたび「主流社会」という言葉を使用しているが社会のマジョリティが潜在的に有している暴力性、それが「烙印押捺」という形で行使されることの危険性を「ジプシー」の歴史を通して明らかにしているように思われる。

そして、本書において取り上げられた「ジプシ

ー」という、日本にいるものにとってはあまり馴染みのない存在を通して、改めて私たちの日常に存在している数多くの人権侵害の実態を、我々が意識的に掘り起こし続ける必要性が示されたとも言える。「グローバリゼーション」のただ中にあり、また今後ますますそれが拡大する時代にあって、安易に問題を「知ったかのように」切り捨てていく態度が、あらたな人権問題を引き起こす危険を常に孕んでおり、そのことにますます鋭敏であらねばならないと思わしめられる一冊である。

舟木 讓 (関西学院大学人権教育研究室副室長・
関西学院大学経済学部助教授)